

図書館だより

68

読むたのしみを全ての人に

～大活字本を紹介します!～

「大活字本って、なに?」と思われる方がほとんどではないでしょうか。それはご自身の眼が元気な証拠です。しかし加齢とともに、だんだん文字がぼやけたり、見にくくなったりと、読むことにストレスを感じる事ができます。

そんな時こそ、大活字本を手にとってみてください。一般の書籍に比べると出版点数はまだ少ないですが、小説やノンフィクション、児童向け読み物と幅広く刊行されています。

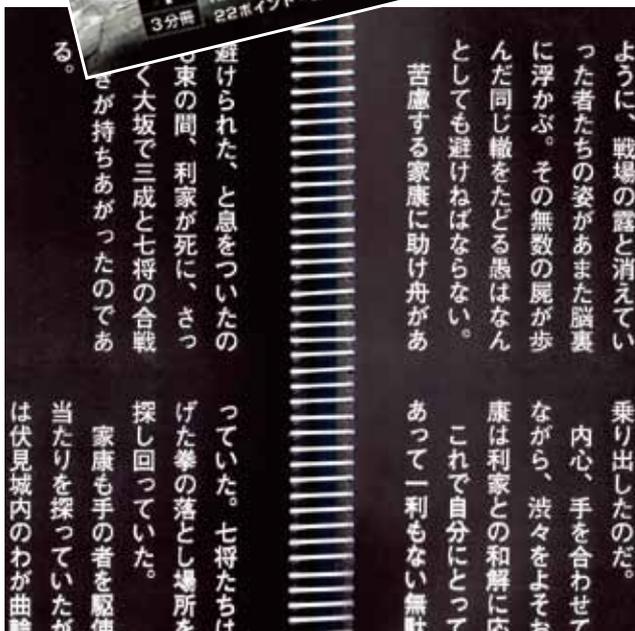


埼玉福祉会から刊行「和菓子のアン」
書籍サイズは単行本より少し大きいくらい。文字が大きくなったので、上下分冊になっています。

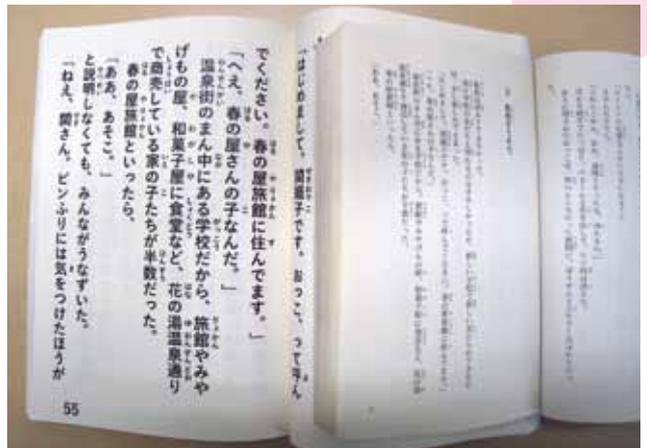


大活字から刊行
「関ヶ原」
B5サイズでリング綴じのビッグサイズです。中身はというと…

画期的な白黒反転、
眼に優しい
22フォントです。



読書工房から刊行「若おかみは小学生!」
小学生に大人気の読み物が、大活字本になりました。弱視の子どもにも読書の喜びを感じてもらえる1冊です。文字の大きさは格段に違います。



★声の広報をお届けしています。

お知り合いの方でご希望の方がいらっしゃいましたら、谷戸図書館(Tel.042-421-4545)へお問合せを。

イベント報告

講演会

「なるほど！盲導犬とあるくということ～視覚障害の私から伝えたいこと」

平成29年8月5日 中央図書館にて

市内在住で視覚に障害をお持ちの江黒知子^{えぐろともこ}さんと盲導犬(アイメイト)を講師としてお招きし、盲導犬との日常生活などについてお話しいただきました。さらに、盲導犬が実際にどのような仕事をしているのかを再現してもらいました。江黒さんと盲導犬との信頼関係や、しっかりした仕事ぶりを見ることができました。

盲導犬を見かけたとき、つい可愛くて近づきたくなったり触ったりするものですが、彼らにとっては真剣に仕事をしている最中です。声をかけることはかえって危険を招くこともあります。『温かい無視』で見守ってほしいと話されていたのが印象的でした。



江黒さんに空いている席を教えて…無事席に着くことができました。



「GOOD」と江黒さんから褒められました！隣の人の邪魔にならないように、足元で静かに伏せています。



音声ソフトが入っているので、パソコンだってサクサク使えます。



同じことばの繰り返しは、文章を単調にしてしまうことも。そんな時は、類語辞典がことば選びのヒントになります。



「耳で聞いただけでわかる文章は、よく整理された文章だ。」書き上げた書評を音読してみよう。

「YA書評講座～本を読んで感じた『!』や『?』を文章にしてみよう！書き方、おしえます～」

平成29年8月4日・18日
ひばりが丘図書館にて

武蔵野大学文学部教授の宮川健郎^{みやかわ たけお}さんを講師としてお招きしたYA書評講座。参加した中・高校生は書評を書きたいお気に入りの本を持ち寄り、第1回ではグループワークを通してその本の魅力を掘り下げるとともに、「ことば」の持つ力や選び方について学びました。第2回では、書いた書評について、引用の効果的な使い方、語彙の工夫の仕方など、さらに完成度を高めるための講義を交え、講師より個別にアドバイスを受けました。

完成した書評は、どれも力作揃いです。図書館HPで公開しています。ぜひご一読ください。

<子どものための地域を知る講演会報告>

「田無村の半兵衛さんと村人たちの世界」

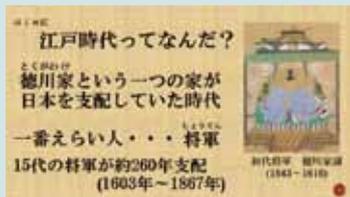
平成29年8月18日

中央図書館にて

講師 **行田 健晃さん**

徳川記念財団 非常勤研究員
中央大学附属横浜中学校・高等学校 社会科兼任講師

「江戸時代とは？」に始まり、「江戸時代の田無村はどんな所で、人々はどのように暮らしていたのか?」、「名主であった下田半兵衛さんと村人たちの関係は?」、「世直し一揆って?」などのたくさんの疑問について図書館にある江戸時代の田無村の記録も見ながら、学校とはひと味違う解説をしてもらいました。後方で見学として参加された大人の方からも「新しい発見があり有意義だった」との声をいただき、世代を超えて一緒に学べた楽しいひとときでした。



講演会を終えて、講師から図書館にお礼の言葉をいただきましたので、紹介します。

今回、「田無村の半兵衛さんと村人たちの世界」と題し、中央図書館さまにて講演をさせていただきました。私自身初めての試みということもあり、形になるまでに試行錯誤しましたが、当日は市内の小中学生や大人の方にもご参加いただき、私にとっても非常に実りあるものになったと思います。村の歴史を勉強する者の一人として、西東京市の方々に私の勉強の成果をお伝えで

きたことを大変うれしく思います。史料から見える江戸時代の村の姿、村のために尽くした名主・下田半兵衛、そして農兵と一揆の人々たち…講演を通して、江戸時代の田無村でいきいきと活動する村人たちの姿を感じ取っていただけたなら幸いです。ご参加いただいた方々、写真提供などでご協力いただいた方々、そして中央図書館の皆様方、誠にありがとうございました。 行田 健晃

にんにん西東京



西東京市図書館キャラクター
西都右京くん

第18回 「農業と農作業うた」ぼうち唄(棒打ち唄)」

” 田 “ がほとんど無かった西東京市の農業は、自給自足の生活をしてきた昭和20年頃までは、主食となる麦の栽培が中心でした。明治中期から大正中中期頃の最盛期には大麦(ハダカ麦、ビール麦など)小麦(ヤナギクボなど)が幅広く作られ、刈り取り後の作業時に「ぼうち唄」が唄われました。

収穫した大麦は、大正初期頃までは水車でついてフルイにかけ、乾燥後、挽き割り臼で挽く「挽き割り」が行われ、大正7、8年頃からは精麦機が入り、動力で麦を押す「押し麦」になりました。ビール麦はビール会社と契約して作りました。大麦が主食、小麦は出荷用であつたこの時代を「うどんと饅頭が何よりのご馳走だった」と語った古老の言葉が『田無のむかし話その5』(田無市立中央図書館編)に残されています。戦後、主食は白米になり小麦が輸



ぼうちの様子
(『田無のむかし話その5』石橋三宣画)

入されるようになると麦の生産はなくなりました。(保谷市域では昭和30年代半ば頃まで作られました。)

10月末頃が麦蒔きの最盛期で、男衆が畑の作を切り(耕作)、女衆はツクテ(堆肥)や種蒔きなどの作業をします。12月半ばから3月彼岸頃までは麦踏みをして土を固め、穂が出揃い6月に入るといよいよ麦刈りが始まります。刈り取った麦は束にして雨に濡らさず乾燥した状態で「ぼうち(棒打ち)」をします。麦を庭へ運び、カナコギで穂を落とし、筵(または土)の上に広げクルリ棒(エゴノ木を4本縄で組み合わせ竹の柄を付けた物)で打ち表皮などを取りまします。炎天下での厳しい作業を手間借り(近所の人たちの協力)で行います。この時掛け合いで歌ったのが「ぼうち唄」です。動力脱穀機が入る昭和7、8年以降は棒打ちも唄も消えていきました。

明治生まれの「がんばり会」の皆様が大正時

代の農業と農作業うたについて語った『田無のむかし話その5』には「ぼうち唄」の歌詞と楽譜が掲載されています。『武蔵保谷村郷土資料』(高橋文太郎著)掲載の保谷市域で唄われた「麦打ち唄」とも次の歌詞などが重なります。

へお江戸に妻は持たねどもお江戸から吹きくる風の恋しさ

へ大山さきから雲がでるあの雲がかかれば雨か嵐か

昭和59年、田無民謡連盟が市内の古老を招いて録音し、翌昭和60年、第12回東京ふるさとまつりの出し物として「田無ぼうち唄」を復活させました。平成26年、公益社団法人日本フォークダンス連盟監修のCDおよびDVD「ふる里の民謡第54集」に、数ある民謡の中から選ばれた1曲として、脱穀の様子を唄と踊りで表現した「田無ぼうち唄」が収められています。この踊りを創作した西東京けやきの会が全国に広める活動を行っています。

DVDとテキストは市内各図書館の地域・行政資料コーナーにあります。



西東京けやきの会の踊り

— 登録の有効期限は5年です！ —

登録いただいている利用者の個人情報を最新で正確なものにし、適正な管理をするため、5年ごとに更新手続きを行っています。

*有効期限の確認方法

館内利用者用検索機・図書館ホームページの利用者メニュー(パスワードの登録が必要)および図書館カウンターで、ご確認いただけます。

自動貸出機では、有効期限の45日前から貸出時に「カードの有効期限が近づいています。カウンターへお寄りください。」とメッセージが出ます。

*更新の手続き

有効期限の45日前から期日の日までに、利用カードの登録者ご本人が図書館カウンターで手続きをしてください。

必要書類 ①利用カード ②身分証(運転免許証・健康保険証・学生証等名前・住所が確認できるもの)

*もし、有効期限が過ぎてしまったら…

期限が過ぎてしまっても、再登録ができますので、利用カードは捨てないでください！

必ず、①利用カード ②身分証をご持参の上、手続きをお願いいたします。

読む？ 読む！

今回のテーマは _____

**“ジャケ借り”?!
～本棚で出会ったあの一冊～**

『駄犬道中おかげ参り』
土橋章宏／著
小学館 2016



今日返ってきた本の棚で見かけました。
かわいい表紙が目にとまり、帯をみると、面白かった映画の原作者さんの本だとわかったので、「ジャケ借り」してしまいました！
食いしん坊の「翁丸」がうちの犬にそっくりで面白かったです！！
ペンネーム：ちょこまる

募集要項

- (1) テーマ: 思わず“ジャケ借り”～本棚で出会ったあの一冊～
 - (2) 応募期間: ～平成29年12月28日(木)
 - (3) 応募方法: ア メール(lib-uketsuke@city.nishitokyo.lg.jp) 件名は「図書館だより」としてください。
イ 来館(原稿(自由書式)を持参)
- ①本の題名 ②著者 ③本のコラム(150文字以内) ④氏名(ペンネーム可)
★①～④を明記の上、アカイいずれかの方法で、お一人様5作品までとします。
※応募原稿はお返ししません。
※選考結果はお知らせしません。採用作品(コラム)は、「図書館だより」紙面に掲載いたします。

小さなアーティスト

「運命の花」

谷戸第二小学校6年

中山朝陽



今から20数年前に旧田無に越してきて、当時幼稚園児だった子どもたちを連れてデビューしたのが中央図書館でした。

絵本や雑誌、話題の本などを手当たり次第に借りるお付き合いは今も変わらず続いています。子どもが小学生の時には読み聞かせサークルで情報交換しながら色々な本を借りて朝の時間に読み聞かせに行ったり、学年が変わるごとに図書館員の方にブックトークをお願いして、どっさり本を紹介していただいたのも懐かしい思い出です。

自分の子どもは成長してしまいましたが、縁あってボランティアになり、朗読や音訳をさせていただいたり、さまざまなおはなし会で乳幼児や子どもたちに絵本の世界を届けています。昔懐かしいロングセラーの絵本からピカピカの新刊、時代にのった人気の本など、気になるものはインターネットで検索して予

約を入れれば簡単に手にとることができ、本当に便利になりました。自分が読みたい本もアンテナを張って早めに予約して入手します。好きな作家の本などたまには買わないと申し訳ないな、とも思うのですが期限があればこそ読めるということもあり、私の読書は8割がた図書館の蔵書頼りです。

市内には6館の図書館があり、それぞれ違った特徴があります。ほとんどの人は最寄りの図書館しか行かないでしょうし、私も全部は行ったことがないのですが、たまには

他の図書館に行くのも面白いですね。とはいえ、私にとっては行きなれた中央図書館がホームです。本が増えてシステムが変わって館内はかなり様変わりしましたが、図書館員の方々の暖かい笑顔と親切な対応とともに、一番通いやすい場所に、これからもずっと変わらずあってほしいと思います。

利用者エッセイ
わたしと
図書館
かとうまや
加藤麻弥